

四葉の破壊者

凱旋の女神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界各国には魔法士と呼ばれる存在がいる。

日本にもいる魔法士の中には、アンタツチャブルと恐れられている者達がいた。

そして、この世界に破壊者と呼ばれた者が生まれた。

その者の瞳は世界の何を見るのか・・・

目次

世界の破壊者 入学編

通りすがりの仮面ライダーの正体と

は・・・ | 1

世界の破壊者 入学編

通りすがりの仮面ライダーの正体とは……

日本のとある山脈地で違法研究所があった。そこには、日本政府の研究所であれば問題がないのだが、とある外国人が違法侵入して無許可のまま研究を行っていた。そこには、拉致された日本人達が培養液が入った槽へ入れられていた。拉致された人達の共通点として、魔法と呼ばれた力を持つ事だ。

「平和ボケの日本人は捕まえやすいですね。この調子だと研究は遅延なく進められます。」

「当たり前だ。戦争に負けた我々と勝った日本人では、考え方が違う。我々はこの先何をすればいいかを考え行動をしているのだから……『侵入者！施設内に侵入者！基地内にいる者は、侵入者の排除を……ヴウ！』……全員、侵入者来た。侵入者を出迎えてやれ！」

研究室にいた指揮官らしい者が、室内にいた者達に士気を上げる為に、声を荒げて侵

入者を待ち受けていた。

《CLOCK OVER》

機械式の音声聞こえた瞬間に、不法侵入者達の目の前に黒をメインとした格好で、顔にバーコードの様な物があり目が青く、胸部から左肩へ青と白のラインがある人型の者がいた。

「おい、ここは日本だぞ。ましてやこんな気分が悪くなる様な研究をしやがって。この代価はお前らの命としてやる、感謝しろ！」

「いきなり現れて何を言い出したかと思いきや、魔法の力が纏ったスーツで侵入したても、このアンテナナイトがあれば貴様の様な者は、簡単に殺す事が出来るんだよ。」
「可哀想な奴らだな。相手の力を確認する事も出来ない奴らなんて。」

《ATTACK RIDE ILLUSION!》

指揮官達が見たのは目の前にいた者が、1人から3人へ増えた。いきなり増えた事に

動揺してしまった。

「貴様は一体何者なんだ!？」

「俺か？俺は通りすがりの仮面ライダーだ。覚えなくていい、どうせ消えるんだからな。」

その研究所から銃声と魔法が起動する音が聞こえ、研究所から爆発音と煙が聞こえた後は、何も音が鳴る事は無かった。そして、研究材料として拉致されていた日本人達は、数日後にはとある病院で意識を取り戻していた。

「お疲れさま、士。現段階では違法研究所はもう無いわ。予定通り、あなたは達也さんと深雪さんと同じ高校へ入学してもらいます・・・四葉として。」

「了解した。当主様の言う通りに・・・てか、入学式って今日だよな？」

「ええ、そうよ。だから、ライダーシステムで向かって頂戴。あなたが住む家は端末に送るわ。それとガーディアンについては、明日の昼前には居るようにしますので・・・これで当主としての話は終わりです。つーちゃんと離れ離れになるなんて、おかーさん寂しいわ。」

「あのな。もういい歳なんだから、いい加減子離れしろよ。これじゃ、いつまで経っても葉山さんにバカにされたままだぞ？」

「いいのよ、私と葉山の主従関係の中で許される事なんですから。それと四葉としては別ですが、母親として恋人達を見つけてきなさい。七草の長女とかはカウント外よ。」

「はいはい。親からハーレムを築けって言われるなんて、びっくりしたわ。」

とある屋敷には、この日本の十氏族の四葉当主、四葉真夜とその従者である葉山がいた。そしてその者達の前には、四葉真夜の実の息子である、四葉士がいた。

「葉山さん、お袋をお願いします。そして、いい子にしろよお袋。」

「私はあなたのおかーさんよ。それなのに・・・」分かりました、士様。道中お気をつけて。」ちよつと、葉山。私はそんなダメな大人じゃありません！」

士は親と従者の漫才の様なやり取りを見て笑っていた。国立魔法大学付属第一高等学校の制服を着て、腰に白いバックルが付けられていた。

「じゃあ、行ってくる・・・変身！」

《KAMEN RIDE DECADE!》

とある違法研究所に現れた黒をベースとした、仮面ライダーディケイドが現れた。基本カラーは黒・白・ゴールド。複眼の色は青である。

マシンディケイダーに乗り込み、とあるカードをバックルへと入れた。

《ATTACK RIDE KABUTO EXETENDER》

マシンデイクライダーがカブトエクステンダーへと変化し、さらにエクスマードへと姿を変えた。

《ATTACK RIDE CLOCK UP!》

真夜達が見たのは、機械音声と共にバイクが変化したと思った時には、砂埃とタイヤ痕しか残っていないかった。

「あの子はもう少し、落ち着きを持つ事は出来ないのかしら？」
「それは真夜様が、入学式当日に伝えたのが悪いと思います。」

葉山からの言葉に真夜は、その場で動けなくなつた。

「そんな事分かってますよー！」

真夜の叫びは朝焼けの空へ響いた。